

令和6年度 学校関係者評価書(様式)

鈴鹿市立天栄中学校		NO. 1			
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	成果と課題	今後の改善点	学校関係者評価	
学力向上×ICT活用	・「つながり」を作る授業づくり。 (研修部を中心に協働課題の設定、授業実践交流) ・授業でICTを活用する。 →アンケート「自分から進んで勉強に取り組んでいる生徒」肯定的意見70%以上 →「授業中自分の考えと比較しながら、友達の考えを聞いている」肯定的80%以上 →「授業では自分の考えを発言しやすい雰囲気を作られている」肯定的意見85%以上	・協働課題を取り入れた授業改善や「つながり」を育む取組(天栄アプリシエーターズ等)を組織的に行うことができた。 →「自分から進んで勉強に取り組んでいる生徒」肯定的意見1年生75.4%、2年生56.9%、3年生76.4% →「授業中自分の考えと比較しながら、友達の考えを聞いている」肯定的意見1年生94.3%、2年生89.4%、3年生91.7% →「授業では自分の考えを発言しやすい雰囲気を作られている」肯定的意見1年生90.2%、2年生87.8%、3年生84% ・ICTの活用に関しては、組織的に何かを行うことはできず、各教員でそれぞれが行っていた。	・授業の中で課題に対して仲間と協力しながら取り組む姿が増えてきたが、その学びを自分事として捉えて深く学ぶことや、自ら「主体的」に学ぶ生徒を育てるためにはどうしていくべきかを今後考えていきたい。 ・自分から進んで勉強、学んでいくための土台となる安心できる教室(学びの場)を作るための取組は継続して行っていきたい。 ・授業における効果的なICTの活用についても組織的に実践を行うことができるように研修部中心に考えていきたい。	・活用が目的ではない。1から活用を探るのではなく他校の実例を参考に、いいとこどりで活用が広がっていけばよい。 ・グループで試行錯誤を繰り返しながら答えを見つけていくプロセスは、将来多くの場面で応用できると思いますので進めたいと思います。グループとクラス全体をマッチングさせることやドロップアウトしそうな時の対応など心配なところもありますが、ICTの活用や天栄アプリシエーターズの取り組みの進展などでフォローできる(教員の負担は大きいと思いますので大変だとは思いますが)ようになれば良いと思います。 ・授業づくりは素晴らしいと思います。肯定的に授業に取り組んでいる生徒が多く充実したものになっていると思います。学年が上がるにしたがい肯定的な数値が低くなっているように感じられる。これは各学年のとらえ方の差なのか、年齢が上がるに従い下がっていくものなのかを分析されて、改善につなげられるとよいと思います。 ・協働課題に対して仲間と協力し、つながりを育む取組は、グループ間で話し合う姿から見受けることができました。 ・自分から進んで勉強に取り組む生徒の割合が低いので、意欲を持って取り組める場の設定がいるのではないのでしょうか。 ・授業参観時にICTを活用している授業をたくさん見ました。先生方は分かりやすく効果的なICT活用を図っていると思います。ICTの活用により授業展開がスムーズに行え、生徒自身の考える力がさらに助長されるように期待します。 ・協働課題を通じて「つながり」が深まっているのを授業参観にて感じた。テーマの選定について教師がよく研究されていると感じられるが、生徒達が興味を引くような内容を精選して欲しい。 ・「つながり」を育む取組に関する生徒アンケートにおいて、肯定的な意見が多数を占めていることから大いに評価できる。ただし、それが本来の学力向上につながっているのかの検証が期待される。	
	・生徒支援部会での週に一度の情報共有と支援の方法の検討をし、必要に応じて医療や関係機関と連携を図る。 ・学期に一度教育相談を実施する。 →鈴鹿市「安心して学べる学校を目指して」アンケート「困ったことがあれば学校の先生に相談できる」80%以上	・生徒支援部会での週に一度の情報共有を通して、欠席が多かったり長引いていたりする生徒の早い段階での把握ができ、またその場で支援方法の検討をする時間を取ることができたことが成果として挙げられる。一方で、部会での報告生徒数が多くなり、あまり検討する時間が取れないことも多いことが課題である。 ・教育相談期間をしっかりと確保してもらい、丁寧に教育相談をしてもらうことができた。 →鈴鹿市「安心して学べる学校を目指して」アンケート「困ったことがあれば学校の先生に相談できる」(3年生91% 2年生86.2% 1年生85.2%)	不登校となる事由が本当に様々である中、多様なケースに対応できるように、対応する時間や生徒たちの安心できる居場所を今以上に確保していく必要がある。また、困ったときに頼れる、日頃からどんなことでも相談できるような関係を教師と生徒間だけでなく生徒間にも広げ、安心できる教室、学校を目指していければと思う。	・不登校事由は様々であるものの、経験者の『困ったことからの脱出』実例は、直接的ではなくとも、彼らと彼らを見守る家族を勇気づけることはできるかもしれない。 ・不登校はある意味価値観の多様化・学校だけで解決できない社会現象(全不定されることではない)・・・当事者の経済的負担なども考慮した新たな公的な受け皿づくりが必要だと思います。 ・学校としては、該当の生徒に寄り添い、相談などの支援をしていくことが当面の対応策だと考えます。 ・「日頃からどんなことでも相談できるような関係を教師と生徒間だけでなく生徒間にも広げ」という文章はおかしいと感じます。安心できる教室、学校を目指すことは安心できる居場所(学校内)を確保することから得れるものであると思います。教師と生徒間だけでなくそれ以外の人たちにも広げとされたほうがよいと思います。 ・困ったことがあっても先生に相談できない生徒にとっては教育相談は苦痛である。先生と生徒との信頼関係が大切であり、担任の先生だけでなく、話しやすい環境が必要。不登校の対策としては、欠席が長引いてからでは遅い。 ・なお、家庭との連携は？ ・不登校対策としての居場所の確保や小さなことでも相談できる安心感が持てる環境づくりを進めていることがよくわかります。送迎車が多いのは驚きでした。 ・長期欠席者への対応は、先生方へ大きな負担となっているのではないのでしょうか。生徒が抱える通学への不安に対して、生徒に寄り添い、少しでも改善できますようお願いします。 ・アンケートの率が高いのは評価できる。不登校となる事由については、生徒側で気づくことも多いので、生徒からのヒアリング機会をより多くもって欲しい。 ・先生に安心して相談できる学校づくりができており、大いに評価できる。	

地域連携	・学校運営協議会、PTA諸会議をはじめ、地域や保護者に対し、学校経営方針や取組を継続的に発信することを通して、「目指す子ども像」を共有する。その上で、子どもたちの学びと育ちをどのように支えていくかという視点で、学校づくりへの協働の機会を増やす。 ・学校運営協議会に教職員が参画できるように、時間設定、内容を工夫改善する。 ・働き方改革の要請も踏まえながら、地域行事への生徒の参画を進める。	・学校運営協議会での学校経営方針の継続的発信に加え、年間2回の授業参観により、より具体的に目指す学校像、子ども像を共有することができた。特に、授業づくりを中心とした学校づくりについて、子どもの変容を踏まえた熟議を行い共通理解を深めることができた。 ・学校運営協議会の各回にキャリアステージの異なる教職員が参加することができ、地域の方々の思いを知ることができた。また、授業参観後の教職員との懇談を通して、学校の取組の意図や工夫について発信することができた。 ・学校だよりやホームページを通して、地域や保護者に対し継続的に丁寧な発信を行うことができた。 ・コロナ禍の影響で、保護者や地域の方々が学校に足を運ぶことができる機会が少ない。 ・休日に行われる地域行事に、文化部が賛助を依頼される場合が多い。貢献できる場が生まれる一方で、部活動ガイドラインや働き方改革の観点から負担増にならないように調整する必要がある。	・CS、学校運営協議会の取組が、広く地域全体、保護者全体に周知されるよう、引き続き情報発信を継続、工夫したい。 ・学校運営協議会の熟議を通して共有することができた学校教育の役割や学校の取組の意義を、具体的な改善につなげるために、教育課程や校内組織の改善に努めたい。 ・保護者や地域の方々が学校に足を運ぶことができる機会をどのように設けるか、年間行事計画や教育課程の工夫により検討したい。 ・地域行事への参加については、まちづくり協議会等との情報交換を行いながら、より良い連携のあり方を模索したい。	・学校運営協議会で教職員の方と話をする機会を作っていただき、非常に良かった。 ・授業参観などで感じたのは、5年前とは授業のやり方が激変し、生徒と先生の様子も雰囲気が違うこと。（そして、下校時送迎車の駐車場混雑の酷いことといったら…。）地域にも、この変化は知ってもらいたいと思う。 ・現場の先生の生の意見を聞き、情報共有できることは良いことだと思います。 ・多様な考え方を持っている保護者の皆さんと先生がお互いにリスペクトできるような関係になればと思います。まずは、正確な情報が必要とする時期に保護者に届く（部活等の場合も含めて）ことが大事だと思います。 ・地域の行事等への参加については、できるだけ対応いただくようお願いします。 ・学校からの発信はよく行っていると感じています。地域連携は廃品回収の方法の改革に伴い、かなりつながりの分断が起こったと感じています。校内組織の改善の中に生徒が大人になった際に職場や、家庭、地域で持ち合わせていたい力の育成につながる観点を加えていただけるとよいと思います。 ・学校運営委員会に各学年の先生が参加してもらって学年のことがよくわかってよかったです。 ・吹奏楽部の生徒（1、2年）が稲生地区の敬老会で演奏していただき、皆さんがとても喜んでいました。指導教諭の確保や休日での参加は難しいとは思いますが、地域の人（特に高齢者）には安らぎがあったようです。 ・地域づくり協議会での「避難訓練」開催時に吹奏楽部の先生と生徒の方々に出演していただきました。日頃はスピーカーからの音に慣れており、吹奏楽部の生演奏は迫力があり、避難訓練参加者から好評を博しました。この場を借りてお礼申し上げます。今後とも宜しく願いいたします。学校と地域との連携にもつながると思います。 ・学校運営協議会は、教員の参加もありうまく機能されているが、保護者や地域の方が学校に足を運ぶ機会が少ない。身近な文化祭や体育祭を見てもうることから始めてもいいのではないかなと思う。 ・学校行事へのPTAや地域の協力やPTA行事への教職員の協力などができており、子どもたちの学びと育ちを支えていく協働の機会づくりができており、大変評価できる。
非認知能力育成	・「つながり」を作る授業づくり。（協働課題を設定した授業。） ・組織的な承認活動の実施。 ・レジリエンスを育む授業の実施。 →アンケート「自分には良いところがあると思う」80%以上、「自分もやればできるという思いをもっている」85%以上。	/生徒それぞれの良いところや小さな行動に対しても生徒同士がお互いに感謝し、良さに気づくことができる取組を組織的に行った。レジリエンスの取組も継続して行うことができた。 「自分には良いところがあると思う」1年生85.3%、2年生79.7%、3年生84.1% 「自分もやればできるという思いをもっている」1年生93.4%、2年生82.1%、3年生91.7%	・まずは教師が少しでも生徒の良さに気づき、生徒自身が少しでも自信を持ったり、自分の良さを認識できるように日頃から声掛けをしていく。その中で生徒同士がお互いにお互いの良さを認め合えるような関係（つながり）を作っていきたい。 ・非認知能力を数値化できるものではないが、アンケートの指標としては、「自分には良いところがあると思う」項目の100%を目指して取り組みたい。	・生徒の行動に対し、大人は機会を逃さず「ありがとう」を伝えたい。 ・非認知能力（特に、レジリエンス力・自己制御力・他者との関係を築ける力）育成に学校現場でできることはどんなことで、そのための教員の必要なスキルは(具体的に)どんなことでしょうか？ ・また、家庭（保護者）の理解と連携した取り組みが必要ではないでしょうか？ ・協働課題を設定した授業づくりによって、お互いを認め合えるような関係を参観で見れたことには感激しました。しかし、非認知能力育成の評価を主観的なものを数値化したもので評価することに危うさを感じます。何か運動している物が見つければよいと思われます。 ・「自分には良いところがあると思う」というアンケートは80%以上ではなく100%を目指してほしい。生徒同士よりも大人が生徒の良さを見つけ、声をかければ自信を持つことができるはず。 ・グループの中でお互いを認め合うことから周りの子へ目を広げていくような指導や環境づくりを進めていってもらえたらいいと思います。 ・拡大時に講師の先生から講演がありましたが、たしか幼児期の教育が大切とのことでした。生徒の持つ人間としての基本能力、それをいい方向へ育て上げれるような環境構築が大切だと思いました。 ・AIが進化する一方で非認知能力の育成は重要性を増す。「天栄アプリエターズ」や「クラスの中の自分」といった取り組みは実施方法を必要があれば見直し、継続して欲しい。

特別支援教育	・一人ひとりのニーズにあった支援を行う。 ・特別支援学級の運営方針を明確に伝え、理解を促し、すべての教員が同じ方向性で生徒支援に当たれるようなシステムづくりを行う。 ・生徒の情報交換をこまめに行い、それぞれの生徒の現状を常に把握し、その後の支援の手立てを協同しながら考え、実践につなげる。	・生徒一人ひとりのニーズを把握し、それぞれの教員で支援を行うことができた。 ・情報共有のシステム（週1の会議や日報の入力など、昨年度にはなかったシステム）を作り実施していくことができたが、入力についてはなかなかうまく機能ができず、情報が伝わらない部分も発生してきたため、教員に対して、何のためにやっていることかを理解を促しながら実行していくべきだった。	・何より情報共有が大切だと考え、特別支援学級担当や授業担当の教員との情報共有や連携ができるようにしていきたい。 ・一つの教室でいろんな教員が授業をしているため、他学年との関わり合いが持ててよかったが、生徒たちの集中した環境ではなかったため、与えられた教室をフルに活用をして、個別授業の充実を図っていきたい。	・特別支援学級の生徒について、できるだけ普通学級の生徒との交流機会を設けていただければと思っています。日常のなかで誰もが「多様な仲間と一緒にいること・話が出来ること」が普通にできれば相互の理解が深まると思います。 ・一人ひとりの困り感に寄り添っていただいていることはよくわかりますが、先生方にとって週一の会議の日報の入力はかなりハードなのではと思います。 ・各先生方の情報共有と連携により、これからも生徒のニーズにあった支援を行うようにお願いします。
生徒指導	・SNSによるトラブルをなくすため、生徒に対するスマホ等機器の適切な扱い、及びSNS等に係るトラブル防止の指導だけでなく、スマホに係る実態調査から、保護者への呼びかけを行っていく。 ・今後も各学期のいじめについてのアンケートや教育相談等により、いじめの早期発見と早期対応に努める。	・保護者や地域への呼びかけだけでなく、生徒がSNSについて学ぶことができるように、講師を招いたり講習を受けたりする機会を設けた。 ・今後もいじめの早期発見と早期対応に努める必要がある。	・大きなトラブルはなかったが、今後もSNSの使い方やマナーについて学ぶ機会を設ける必要がある。 ・いじめゼロを目指して引き続き取り組んでいく。いじめの早期発見と早期対応に努めていく。	・三重県警察HPIにも、「SNSトラブル防止」として、動画・まんがなどが掲載されている。 ・下校時、ヘルメットを着用していない生徒を見かけることが多くなった。 ・ネット環境への依存度が高くなって、無意識に自分の好みや考え方に合致した情報のみに接している恐れがあることから、異質なことを拒絶せずに多様な他者とコミュニケーションができる寛容さの醸成が必要だと思っています。 ・生徒指導とは外れますが、メディアリテラシー教育を本格的に教育課程に取り込み、授業として実施する時期に来ていると思います。 ・本年度は異常にヘルメットをかぶらず自転車を運転する生徒を多く見かけました。自転車の運転手として社会から求められている責任が重くなってきている中で、被害者、加害者となりうることの認識が薄らいでいるように感じます。 ・SNSの使い方やマナーについて学ぶことも大切であるが、わかっていて写真を載せたりしているのを目にすることがある。マナーを守れない時にどう指導するのか、保護者を含めて考える必要がある。 ・スマホ教室等でSNSでの拡散がどれだけトラブルに広がっていくのか等、今後も指導していった欲しいです。 ・実際にSNSトラブルが発生しているのでしょうか。いじめも含め気軽に相談できる、例えば「何でもトラブル相談室」のようなものがあれば、発生防止に向けた指導とともに、トラブル発生時には迅速な相談・対応ができると思います。早期解決に向けた態勢づくりが大切かと思います。今日、小中高生徒の自殺者が増加との報道に心が痛みました。 ・引き続き、SNSによるトラブル事例もまじえた講習を実施されたい。また、こうした問題を家庭で話しあえるような、保護者への投げかけも重要。 ・いじめアンケートや教育相談等の実施により、いじめの早期発見・早期対応に努めており、大いに評価できる。SNSについての学びや人権教育とも関連させて、さらなる向上が期待される。
人権教育	・互いの人権を尊重し、仲間を大切にするとともに、つながりあい、支えあう集団づくりができるようにする。 ・互いに知り合う取組として「生活をつづる」取組を行う。自分の想いを話すことや表現することを意識させたい。またその中で仲間の本音の想いを受けとめ、違いを理解したり共感できたりさせたい。	・人権教育部会を週一度行い、組織的に人権教育を進めることができた。 ・互いに知り合う取組として「つづり作文」を全学年で取り組むことができた。 ・2年生では、人権学習指導資料「みらいをひらく」の中にある「みんなが住みよいまちづくり」をもとに「外国人の人権に係る問題」について学習を深めた。そこから2年生の代表20名と校区の4つの小学校の生徒が参加する人権フォーラムで意見交流をした。生徒が主体となり、進めることができていた。	・人権フォーラムでのテーマが小学校からおりてきたものを単発的に扱うことになってしまった。小学校とのカリキュラムを4月時にしっかりと練り合わせて系統立てて人権教育ができるようにしていきたい。 ・稲生小児童（校区人権フォーラムに参加できない）との交流がないこと。	・他人事＝3人称としてではなく、より近い『2．5人称』で考えるようにして欲しい。 ・人権が尊重される社会を目指すには、これを意識し続けるなど普段からの学習と努力が必要（油断すると自ら人権侵害行為をしてしまう）だと思います。人権教育はイベント的な対応も必要ですが、各教科はもとより学校生活全体での継続的な取り組みが大事だと思います。 ・「つづり作文」の取組についてくわしく教えてください。 ・稲生小との人権フォーラムの交流は白子中学校のこともあるので難しいかも…。 ・自分があって相手がある。相手も自分と同じように大切です。まず相手を尊重することが、結局自分につながることになる。人権問題は生徒自身が相手の立場に立って、問題を解決しようとする気持を持ってもらうことが大切なのかも、。 ・人権フォーラムで小・中学校が交流でき、たがいに知り合う機会が増えている。内容を精査しつつ、継続することを望む。

生徒会	・学校行事の計画や運営に生徒の意見を取り入れ、生徒主体の取組として活動する。 ・あいさつ運動やいじめ防止運動などの活動を行い、生徒がよりよい学校生活を送ることにつながる。 ・生徒会研修会で他校と交流を図り、生徒会の取組を共有することで活動の改善やブラッシュアップにつなげる。	・体育祭では生徒会種目の企画を行い、新しい種目を提案し、進行方法やルール作成など、試行錯誤をしながら企画することができた。 ・文化祭ではオープニングムービーを作成し、活動を盛り上げることができた。 ・あいさつ運動では、いじめ防止活動として、天栄バッグにピンクのストラップをつける取組を生徒が考え、実行することができた。 ・生徒会研修会では他校と活動内容の共有を行い、意見を交流することで、今後に生かすことのできる取組となった。	・体育祭の生徒会種目では、ルールの設定に甘さがあつたため、デモンストレーションを行い、細かく設定していく。 ・いじめ防止運動が12月になったため、本来の11月に行えるように、企画する。 ・生徒会の取組を放送や通信などを活用し、生徒全体で還流する機会をつくっていきたい。また、生徒会の取組を地域にも発信し、ピンクシャツ運動等、連携して実施できることはないか模索したい。	・活動する主体は、生徒会ではなく、生徒であるという意識がもてたら良い。 ・生徒会活動は他校との交流することによって、文化や地域性等の違いを認識して、より幅広い視野で活動できると思います。生徒の能力開発にもつながると考えるので、他校との交流・議論の場を大事にしていきたい。 ・仲間はずれはいじめではないというが、いじめの始まりでもある。いじめはよくないとわかっていても、いじっているだけ、からかっていることがある。相手が嫌だと感じたらいけないということをしっかり指導してほしい。 ・体育祭の企画や運営を自分たちで行い、困難をも乗り越え、さらに成長していることがよくわかりました。 ・学校訪問時に生徒の方から「おはようございます」とか「こんにちは」という言葉で挨拶してくれます。私もすぐに「おはようございます」と返します。明るい元気な校風に心の中でホットした気持を持てます。先生方の指導によるものと思います。 ・体育祭・文化祭等に生徒の企画が生かされていることは評価できる。このような生徒の企画立案が、他校ではどんな実例があるのかヒントを与えてあげて欲しい。 ・体育祭や文化祭などの企画運営、あいさつ運動やいじめ防止運動の取組など、大いに評価できる。
小中一貫	・小中教員同士の情報交換を充実させる。 ・中学生と6年生との交流を充実させる。 ・稲生小学校との連携を強化する。 →「学び」「育ち」の各委員会年2回以上開催 →「中学校授業体験」「人権フォーラム」「学びよつなぐれ！プロジェクト」の継続実施 →稲生小学校への視察の実施	・「学びの部会」を3回（内リモート1回）、「育ちの部会」を3回、それぞれ実施し、各校との情報交換、校区での課題の共有ができた。 ・「中学校授業体験」「人権フォーラム」「学びよつなぐれ！プロジェクト」を継続して開催し、6年生の進学への不安軽減につながった。 ・今年度も「学びよつなぐれ！プロジェクト」を稲生小学校でも開催予定だが、「中学校授業体験」「人権フォーラム」への参加は厳しい。 ・3学期に各小学校への視察を予定しているが、昨年度以上のつながりをもつことは難しかった。	・学級を任せて出張することが難しい小学校の先生方とつながるには、中学校側が足を運ぶ必要がある。来年度は、各小学校の研修のタイミング等、計画的に学期に1回は足を運びたい。 ・稲生小学校から本校への進学が決まるまでは合同行事への6年生の参加は難しいが、行事の様子を何らかの形で児童・先生方と共有する方法を模索したい。	・小中一貫校が視野に入ってきた状況を踏まえて、今までとは違いこれをターゲットにした取り組みを計画的に進めていくことが必要だと思います。（稲生小学校についても、なるべく早い時期に一貫校との関係を整理することが必要？） ・「学びよつなぐれ！プロジェクト」が稲生小学校でも開催されるのを楽しみにしています。良い方向にいつくれるといいですね。 ・小学6年生と中学校との交流の機会がいくつか実施され、中学への進学不安が軽減されている。
教職員の働き方改革（業務改善）	・諸会議での決定事項の速やかな共有を図り、組織的な業務遂行を推進する。 ・協議のポイントを明確にした会議運営を徹底し、会議の質の向上と会議時間の短縮を図る。 ・OJTのさらなる活性化により、若手教員、プレ・ミドル層やミドル・リーダーの指導力向上を図る。 ・校務分掌等の校内体制を精査し、業務の平準化および、各分掌の長のリーダーシップによる組織化を推進する。 ・報告・連絡・相談を徹底する。 ・引き続き、部活動休養日の設定等、指針に沿った活動を行うと共に、働き方改革等を踏まえた部活動の在り方について、保護者会等を活用し理解を得る。	・企画委員会での教育活動の方向性共有、学年部会での情報共有が促進されたことにより、組織的な業務遂行が進むと共に、業務改善が図られた。 ・校務分掌組織改善によって役割が明確になり、ミドル・リーダーやプレ・ミドル層教員がリーダーシップを発揮して組織的に業務を遂行することができるようになった。 ・若手教職員の増加等により、業務の平準化が進みにくい現状がある。 ・教育委員会等から求められる調査、報告が増え、事務処理に要する時間が増えている。 ・熱中症対策等、安全確保の必要性が高まったことにより、部活動顧問が様々な対応に迫られ負担増となっている。 ・働き方改革等を踏まえた部活動の在り方について、保護者の十分な理解を得るまでには至っていない。	・校務分掌組織の不断の見直しによって、ミドル・リーダーやプレ・ミドル層教員の専門性向上を促し、組織的な業務遂行を促進したい。 ・OJTの充実による教職員の資質向上を図り、業務の平準化を促進したい。 ・調査、報告に要する情報の汎用化を図り、事務処理に要する時間を短縮したい。 ・働き方改革等を踏まえた部活動の在り方について保護者の十分な理解を得るために、情報発信の充実、工夫を図りたい。	・「調査、報告に要する情報の汎用化」といった事務処理は、他校も同じだろう。 ・漠然と昨年同様の調査ということはないだろうが、そもそも必要な調査なのか？---例えば、出所は異なるが、内容が同じような調査はないか？ 調査に要した労力にみあうだけの、フィードバックが現場の教員になされているのか？ 調査・報告が教員・生徒に役立つものなのか？ ・特に部活については、きめ細かい説明と質疑を保護者との間で行い、その時点の状況の変化を保護者が理解できるように対応が必要だと思います。 ・アプリシエイターへの取り組み、ICTの有効活用、多様な保護者への対応など期待される業務と総勤務時間との折り合いを自分なりのどうつけていくか。得意分野もストレス耐性もそれぞれな教員が、時間の縛りと業務の間でストレスで心身にダメージを受けることが無いよう、何らかの「逃げ道・避難所」が必要？いざというとき同僚に”助けて”といえる人間関係（職場環境）があれば教員のモチベーションも維持強化できると考えます。・調査・報告の内容について、回答しやすい（アンケート方式等）内容に教育委員会も検討が必要ではないか。教育委員会は負担になっていることの認識はないと思う。 ・先生方もいろいろ考えてもらい、少しでも働き方改革ができるようになればと思いますが、なかなか難しいのかな。 ・教員の部活動に関わる時間短縮が必要。引き続き保護者の理解が得られるよう努めて下さい。